

2021年度卒業論文集

鈴木鉄忠ゼミ 3期生

共愛学園前橋国際大学

国際社会学部 国際社会学科 国際コース

まえがき

本論集は、2021年度の鈴木ゼミ3期生の卒業論文を収めたものである。

昨年から初挑戦となったのが、プロジェクト型ゼミのスタートだった。これまで「スロー」をテーマにした文献購読が中心だったゼミを、前橋・赤城スローシティでのプロジェクト型ゼミへと大きく変えた。幸い多くの学生が関心をもって来て、選抜の結果、12名のゼミ生を迎えることができた。1期生の9名、2期生の6名と比べて、もっとも多い人数となった。ゼミ長は宇田川唯さん、副ゼミ長は小林友美さんが担ってくれた。全員が国際コースの所属であり、個性豊かで、自分の主張があり、モチベーションの高いメンバーがそろった。

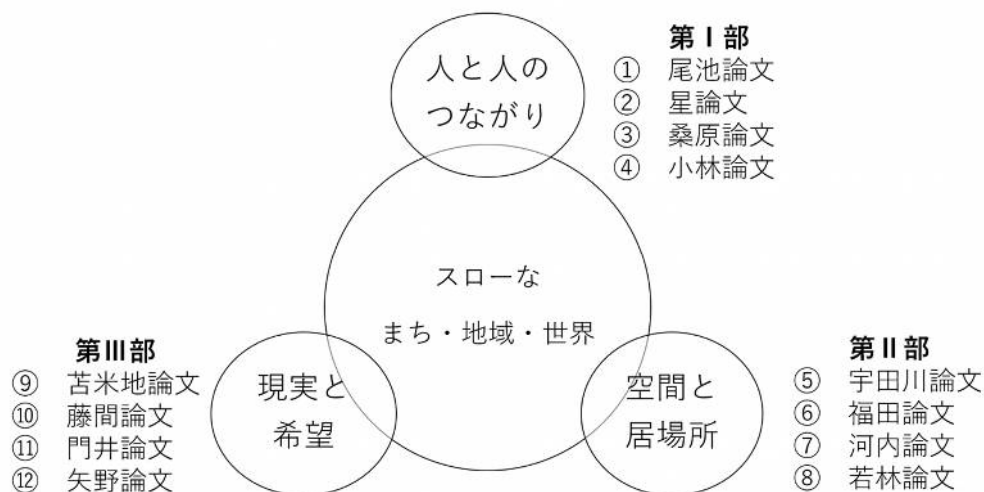
だがさあ始めようと思った矢先、新型コロナウイルスの感染拡大に直面した。3期生は最初から最後までコロナ禍に苦勞することになった。当初の計画が白紙になり、一難去ったらまた一難の連続だったが、ゼミ生一同よく耐えて、3年次は前橋・赤城地域の散策地図「ここすきマップ」を見事に完成させた。詳しくは、教育改革支援費報告書『「見知らぬ私の地元」の探究』と共愛ブックレット『「見知らぬ私の地元」の探究—前橋・赤城スローシティのフィールドワーク』（上毛新聞社、2022年）にまとめた。

卒業論文のテーマの多くは、前橋・赤城地域で学びから生まれた。3年次のゼミ論文でアイデアを言語化し、卒論でさらに掘り下げる人が半数以上いた。正面から地域体験を取り上げていなくとも、テーマ選定、問題意識、本論の行間からスローなまちづくりの体験が垣間見える。

卒論執筆のプロセスも苦勞が多かったように思う。4年生の前期は個人発表を行ったが、就職活動で発表準備まで手が回らない学生が多かった。コロナ感染拡大期には、対面とリモートの併用、あるいはハイブリッド形式で実施するなど、慌ただしかった。よいアイデアはでていのに時間確保がままならず作業が進まない、テーマを絞りきることができない、など、各自が悪戦苦闘しながら作業した。

今年も宿泊を伴う夏の合宿は、コロナ禍で実施できなかった。その代わりに元ゲストハウス I R O R I 場の栗原大輔さんをゲストに迎えて、3・4年生合同発表会をオンラインで実施した。栗原さんからアドバイスやコメントをもらいつつ、前期の仕切り直しと後期からの本格的な再出発にむけたよい区切りとなった。

後期は、毎週担当制で個人発表を行った。毎月末に「論文通信」の締め切りを設け、進捗をアウトプットしながら作業を進めた。ゼミ論のテーマを引き継いだゼミ生は、3年次の「貯金」があったため、それを土台に前進するか、あるいは切り崩したりして、ある程度十分な時間を確保できたように思う。だが夏の終わりまでにテーマを絞り切れず、秋以降に苦戦する学生もいた。「ここすきマップ」作りのように決して平たんではなかったが、卒論提出の期日となる12月20日には全員が無事に提出することができた。



第I部 スローなまちづくりにおける人と人のつながり

12本の卒論は、3部に分けられる。第I部は「スローなまちづくりにおける人と人のつながり」がテーマの4つの論文である。

第1論文は、尾池優香さんの『地域をこえた「つながり」の正体—前橋赤城古民家ゲストハウス「IRORI場」のパーソナルネットワーク形成に関する調査研究』である。前橋市富士見地区のゲストハウスには、誰がどのような活動で集まり、誰と誰がつながっていたか。この問いを丹念なインタビュー調査とネットワーク分析で解明した力作である。「こうなっていたのか!」と、その場にいたはずの私も知らない発見が多々あった。富士見地区は思った以上に「地縁」が強いこと、そのなかでも「よそ者」をつなげる緩やかなネットワークができてきたことを活写したのは、重要な知見である。努力を積み上げる尾池さんの強みがよく表われており、IRORI場を記録した価値も高い。2期生の濱名さんの卒論テーマを引き継ぎ、さらに推し進めた労作となった。

第2論文は、星稀絢さんの『「田舎の田舎」と出会う若者たち—群馬県中山間地域における学生の地域学習に関する調査研究』である。星さんは、学生団体とゼミ活動を通じて、ゼミの中でももっとも長期間かつ深部まで地域に入った一人である。みなかみ町と前橋市富士見地区という二つの「田舎の田舎」での学びを言語化しようと試みた。なかでも学生が地域に入る3段階の整理（第1章）は、先行研究を参考にしつつもオリジナルな仮説であり、これが論文に一貫性を与えた。地域に長く深く入るほど書くのは難しくなるが、自身で論文の軸を発見し論文に仕上げたのは特筆に値する。地域で真剣に、そして楽しみながら学んだことが行間から感じられ、星さんらしい清々しい作品になった。

第3論文の桑原菜緒さんは、人と人をつなげるコミュニケーションの仕掛けに着目した。『若者にささる情報発信とは?—大学生の地域情報収集に関するアンケート調査と「ここす

きマップ」の事例分析』では、なぜ地域の情報は若い人たちに届かないのかを考えた。マップ作りで生まれた疑問を「若者への情報発信」というより広いテーマに結びつけた。全国の自治体が頭を悩ませている地域課題だが、残念なのはテーマ設定に時間がかかったことである。「ここすきマップ」を配布した店舗への深いインタビューや情報の双方向的な送受信の可能性にまで踏み込めば、さらに充実した内容になっていただろう。ぜひこれからもこの問いにチャレンジして欲しい。

第4論文の小林友美さんは、人と地域のつながりを個人のポジティブな感情、すなわち愛着に求めた。『若者の「好き」で地域は「めぶく。」か？—前橋市の定住・関係人口と若者の地域愛着に関する質的調査研究』では、前橋市インターンや海外フィールドワーク・イタリアでの経験から、地域と愛着の関連を探究した。地域の人・モノ・コトへの関与、さらには人が地域の一部になる関与が愛着形成のポイントになる。その知見を丁寧なサーベイとインタビューから導き出した。愛着があるから地域に関与するのか、それとも地域に関与するから愛着が生まれるのか。あるいはその両方なのか。この論点まで考察すればさらに深みがでただろう。ゼミのなかでは唯一、心理的な視点を推し進めた意欲的な作品となった。

第Ⅱ部 スローなまちづくりの都市空間と居場所

第Ⅰ部が人のつながりに着目するものだったのに対して、第Ⅱ部では人々の生活する都市空間のあり方や居場所に焦点を据えた4つの論文である。

第5論文は、宇田川唯さんの『地方都市で多極拠点型コンパクトシティは成功するのか？—桐生市の「小さな拠点」づくりの可能性』である。宇田川さんは早くから出身地・桐生市を取り上げ、計画的に執筆することに成功した。スプロール化からスポンジ化に変容する日本の都市形成を踏まえつつ、そこに桐生市を位置づけ、さらにコンパクト化という今後の展望まで具体的に論じる、きわめて土台のしっかりした作品に仕上がった。先行研究の独自のつながりかたや桐生の事例分析の考察を分厚くすればさらに充実しただろう。飛び地の行政区域をもつ桐生市がいかにコンパクト化と小さな拠点づくりを進めていけるのかまで考察している点は独創性があり、とても興味深い。

都市計画の「鳥の目」からアプローチした宇田川さんに対して、第6論文の福田結香さんは「歩く」という「虫の目」から検討した。『歩いて探すスローなまちづくり—前橋市と館林市のパブリックライフ学調査』で福田さんは、台湾への長期留学とゼミでの地域活動を通じて、スローシティと歩くことの関連に目をつけた。車社会の群馬県で「歩く」はユニークな着眼点であり、今後のまちづくりの重要キーワードである。前橋市と館林市のまちなかを実際に歩いて調べ、そこから得た結果をパブリックライフ学の知見と結び付けた。第4章の調査を複数回実施してデータ収集と分析を充実させれば、さらに厚みのある論文になっただろう。日本の地方都市では軽視されがちな「歩く」に着目し、ここまで掘り下げたことは論文の魅力になった。台湾への目配りもオリジナリティがある。

まちの建物に着目したのは第7論文の河内真夕さんである。『よみがえる古民家—スローな古民家活用をめぐる桐生地域と前橋赤城の調査研究』のルーツは、河内さんがゼミの地域活動で地元・桐生を「再発見」したことである。古民家を見事に改装してカフェや食堂を営む人々がすでに桐生にいたことを知った。20軒の古民家改装の飲食店を調べあげたことは、桐生の実態と変化を知る重要データであり、独創性が高い。ただ調べ上げた後の作業が滞り、時間が足りなくなったのはもったいなかった。それでも「何もない」と思っていた地元にこれだけ魅力的な場所があった。それを驚きとともに発見したみずみずしさが、この論文の魅力になっている。

まちの「場」に注目したのは、若林鼓乃郁さんの第8論文『コロナ禍における「曖昧なプレイス」の出現—現代の日本とイタリアのプレイスの変容に関する調査研究』である。若林さんはゼミのマップ作りとイタリアでの海外フィールドワークを通して、当初から関心を抱いていたサードプレイスのテーマを独創的なアイデアで深めていった。レイ・オルデンバーグのサードプレイス論では、3つのプレイスが独立して存在すると論じられていた。しかし若林さんはファースト、セカンド、サードのプレイスが重なり合うという仮説を提示した。丁寧なインタビューと粘り強い考察を重ねたことにより、十分な根拠が与えられ、仮説の論証に大部分成功した。オルデンバーグの定説に挑んだ唯一の論文であり、なにより読んでいておもしろい。大学での経験と学びを若林さんらしく見事に結晶化した作品となった。1期生の新井さんのテーマを引き継ぐ高論だった。

第Ⅲ部 スローな世界にむけた現実と希望

第Ⅰ、Ⅱ部が「自分の住むまちや地域」を取り上げた論文が多かったのに対し、第Ⅲ部は「自分の生きている世界」を「鳥の目」でアプローチした研究が多かった。視点を広げて、今の現実と将来のありうる世界の可能性に取り組んだ4つの論文である。

第9論文は、苫米地玲奈さんの『SDGsの達成に向けたビジネスにおけるスローダウンの可能性—ファストファッションを事例にスロービジネスを捉える』である。利潤を求めて加速するビジネス界のなかで、「減速」の意義を探究した。スローとビジネスの掛け算で生まれるのは「損失」ではなく、モノ・サービスの生産・流通・販売・消費の各段階における新たな価値ではないか。それがSDGsの実現に貢献し、中長期的には企業の利益にもなりうることを示そうとした。着眼点はよかったが、テーマを確定するのに時間を要したため、本格的に掘り下げる段階で脱稿せざるをえなかった。将来的に重要な論点であることは間違いのないため、今後の仕事と生活のなかで、卒論で描いた海図の余白を埋めてほしい。

第10論文は、藤間梨花さんの『スローライフは夢物語か—ファストな社会におけるスローライフの実現可能性に関する研究』である。当初からスローライフに関心をもっていた藤間さんは、「夢物語なのか」という刺激的なタイトルを掲げて、魅力的でありつつも誤解されてきたスローライフの実態に迫った。精神的豊かさの追求から企業のマーケティング戦略への取り込みまで、玉石混交の実態を論じた。なによりソローの『ウォールデン 森の生活』

まで考察の手を伸ばしたことで論文に深みが出た。残念なのはテーマ確定が遅れて十分な時間が取れなかったことだ。ただしタイトルで掲げた問いは間違っていないので、「夢物語」をどう本当のストーリーとして実現できるのかを考え続けて欲しい。

最後の2つの論文は、シンプルだが奥が深い「幸福」のテーマを選んだ。第11論文は、門井小春さんの『「幸福」のための消費行動—経済成長に頼らない幸福はいかにして可能か』である。モノやサービスを買うとき、役立つかどうか（効用）で人は行動を決めると経済学は考える。しかし効用が大きさは、幸福の大きさと一致するとは限らない。門井さんは幸福のための消費行動という視点で、私たちが消費から幸福を得る可能性を探ろうとした。そのためには資本主義という「深い闇」に分け入ることが不可欠だが、トピックスと問いの絞り込みに相当苦労した。本格的な理解と考察を深める前に時間切れとなったのは残念だったが、資本主義と幸福の関連は永遠の課題である。今後の社会の現場でこの問いを忘れないで欲しい。

最後の論文は、矢野雅人さんの『ファストな社会の幸福論』である。壮大なテーマだったが、早い時期から考えたい方向性が決まり、ゼミのなかでも多くの文献を読みこんだ努力が功を奏して、簡潔な構成に仕上がった。ファストな社会とは「モア・イズ・ベター（多ければ多いほどよい）」の原理で作動し続けるマシンであり、私たちはいつのまにかその高速マシンの部品と化している。そこでは「金銭的な豊かさ」に早く到達しようと「頑張る」ことが、私たち（消費者）の幸福だとされる。矢野論文の面白いところは、スローとは高速回転する歯車からいったん離脱する勇気と遊び心であり、それによって一人ひとり違うはずの幸福にいたる複数の道筋を見せてくれるところである。1期生の井戸君の卒論と重なり合う作品であり、理解し考え続けることを諦めなかったことが、独特の魅力を放つ力作となった。

2月7日には国際コースのゼミの卒業論文ポスター展示会が行われた。今年度は感染症対策のためポスター閲覧のみで、質疑応答は行われなかったが、レジメとポスターが披露された（本論集の補遺に収録）。

卒論優秀論文の審査の結果、鈴木ゼミは力作ぞろいだったが、小林友美さんが佳作（上位10%）、若林鼓乃郁さんが優良賞（上位5人）、尾池優香さんの卒論が最優秀賞に選ばれた。優良賞以上には先生方の講評が行われたので、以下に紹介する。

優良賞の若林さんの卒論は、「場の変容を捉える視点が面白い」「他の論文と比べると書き味がダイナミックだが、単純な面白さなら1・2を争う内容だった」「とにかく読んでいて内容がおもしろかった。アイデアが独創的だった」と高い評価が集まった。

尾池さんの卒論は、すべての先生方の評価を得て最優秀賞に選ばれた。去年の濱名さんの卒論と並び、ゼミで最優秀賞の獲得は2年連続の快挙である。「前橋に位置し、地域での学びをうたっている大学で、本当にここまでの深さと水準の論文ができることを証明した、一つの到達点。前橋市長にも読んでほしい」「レジメ・ポスターとも必要事項が網羅されて

まえがき（鈴木）

おり、見やすさ、読みやすさとも満点」「前橋・赤城のゲストハウスの人々のつながりをここまで丁寧に描ききった。10年後、20年後も価値をもつ」という高い評価を頂いた。尾池さんの地道な努力の賜物であり、それと同時に調査に長い間協力してくれた方々の助力も後押ししてくれた。

論文は「書いて終わり」ではなく、その後の振り返りとフィードバックが大事である。

「もっとがんばればよかった」「もっと書けたはず」と思うとしても、現時点の精一杯を受け容れ、調査協力者に成果を開示し、残された宿題にこれからも取り組んでほしい。なにより12名全員は、書かねばならないものを期日があるなかで書きあげた。

なお製本版の論集には、紙幅の関係上、インタビューの文字起こしなどを載せた各卒論の補遺を割愛せざるをえなかった。

最後に、新型コロナウイルスが直撃した2年間のなかで、けっして楽とはいえないゼミと地域の活動を同伴してくれた12名全員に感謝したい。次の4期生にもいい刺激と影響を与えてくれたことありがたく思う。そして惜しめない協力と理解をいただいた前橋地域の方々に深くお礼申し上げたい。学生たちがいつかどこかの地域で、「恩送り」をしているのではないかという予感を抱きつつ、まえがきを締めくくる。

2022年2月22日

鈴木 鉄忠

目次

まえがき 鈴木 鉄忠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第Ⅰ部

1. 地域をこえた「つながり」の正体—前橋赤城古民家ゲストハウス「IRORI 場」のパーソナルネットワーク形成に関する調査研究

0182009 尾池 優香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

2. 「田舎の田舎」と出会う若者たち—群馬県中山間地域における学生の地域学習に関する調査研究

0182062 星 稀絢・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

3. 若者にささる情報発信とは？—大学生の地域情報収集に関するアンケート調査と「ここすきマップ」の事例分析

0182021 桑原 菜緒・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

4. 若者の「好き」で地域は「めぶく。」か？—前橋市の定住・関係人口と若者の地域愛着に関する質的調査研究

0182024 小林 友美・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109

第Ⅱ部

5. 地方都市で多極拠点型コンパクトシティは成功するのか？—桐生市の「小さな拠点」づくりの可能性

0182008 宇田川 唯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153

6. 歩いて探すスローなまちづくり—前橋市と館林市のパブリックライフ学調査

0182059 福田 結香・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 219

7. よみがえる古民家—スローな古民家活用をめぐる桐生地域と前橋赤城の調査研究

0182018 河内 真夕・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 253

8. コロナ禍における「曖昧なプレイス」の出現—現代の日本とイタリアのプレイスの変容に関する調査研究

0182081 若林 鼓乃郁・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 281

第III部

9. SDGsの達成に向けたビジネスにおけるスローダウンの可能性ーファストファッションを事例にスロービジネスを捉える	
0182046 苦米地 玲奈	329
10. スローライフは夢物語かーファストな社会におけるスローライフの実現可能性に関する研究	
0182060 藤間 梨花	353
11. 「幸福」のための消費行動ー経済成長に頼らない幸福はいかにして可能か	
0182014 門井 小春	381
12. ファストな社会の幸福論	
0182077 矢野 雅人	399
補遺	
卒論レジメ	437
卒論ポスター	463

2021 年度

共愛学園前橋国際大学 国際社会学部 国際コース
卒業研究 鈴木鉄忠ゼミ 3期生 卒業論文集

発行日 2021 年（令和 3 年）2 月 28 日

編集者 鈴木 鉄忠 suzuki-t@c.kyoai.ac.jp

発行所 共愛学園前橋国際大学

〒379-2192 群馬県前橋市小屋原町 1154-4

電話 027-266-7575 研究室直通電話 027-266-9256
